

コロンビアの ストリート・チルドレン

津守 真

コロンビアに行く前に、新聞などを通して知らされていたことは、治安が悪いこと、テロなどの暴力、ストリート・チルドレンのことなどであった。いま、そこから帰って来て、それらのことはほんの一部分であることが分かる。コロンビアの幼児教育大会で聞いた話にはうなづくことも多く、質の高いものであった。ここには日々の生活の中で、一生懸命に生きている人達がたくさんいる。

OME Pの世界理事会も終わり、次の日、

私は特別の予定もなく、ゆっくりと今回の会議の整理などとして過ごそうと思っていた。私の共の宿舎であるミリタリー・クラブのホテルの食堂で、いつものように朝食を済ませて出てくると、コロンビアOME Pの前会長であるベアトリーチェ・ド・ヴェガ女史が私をみて、ストリート・チルドレンのところに行く気があるかとたずねた。フロントに行くと、フランスのグートル女史と、ブラジルのダイトネー氏とが待っていて、大急ぎで来てくれ

という。良く分からぬままに、仕度をして、皆の車に乗り込んだ。

町の中を通りぬけ、修道院でひとりの神父を車に乗せた。パードレ・ニコロと紹介された。明らかに皆から尊敬されていたが、ごく普通の身なりで、この人がストリート・チルドレンの学校をつくっていて、そこにつれて行ってくれるとのことだった。ポゴタの町は植民地時代のスペイン風の建造物が多いが、壁が落ちていたり、壊れても修理されないままの建物も多い。道の両側に屋台の店が並んでいる猥雑な地域に来了。そこら一帯は最も貧困な地域だと説明された。その真ん中で車が止まり、ドアが開いた。ほとんどぼろをまとった人々がそろそろ歩いていて、道には汚水が流れていた。私は一瞬ここで車を降りるのかと驚いた。パードレは、自分がいるから危険はないと言った。人々がパードレに抱擁

したり握手を求めてよって来た。パードレもひとりひとりに元気かと声をかけた。道の両側には、肉の塊を皿に入れて並べる人、崩れたケーキのかたまりを売る人、それを手づかみで食べている子供達。町全体に汚臭が漂う。半分壊れた石の壁の内側には、廃物がうずたかく積まれ、その奥に小さな子供、がうずくまっている。石壁のわきに布を張って、そこから首を出している人々などがそこらに満ちていた。そんな中で、大人に手を引かれて歩いている子供達もいた。本当の親がだれか分からない人が多いが、その子供達を育てる人もいるという。どこでもパードレ、パードレと声をかけられ、私共も握手をしながら歩いた。

その町の真ん中にある鉄の扉を、パードレがたたくとドアがあけられた。そこは子供達を

預かる施設だった。パードレが入って行く
と、小さな子供達がわやわやと寄って来た。
パードレは一人ずつ抱いて、頬ずりをした。
私はそれを見ていて何か涙が出そうになっ
た。パードレは夜になると、その町を歩き、
一人でいる子供を見ると、そこに連れてくる
のだとのことだった。子供達は清潔な服を
着、きれいな肌をして、明るかった。赤ん坊
の部屋があった。一〜二か月から、七〜八か
月まで一〇人ほどがベッドにいた。こうして
書いていても、何かあの町の臭いが手に染み
付いているみたいで、思わず手を鼻に持って
いってしまう。もうひとつの部屋の隅には二
〇人ほどの幼児たちが、テーブルに併せて、先
生と賑やかに唄ったり、手をたたいたりして
いた。私共も一緒に手を叩いた。

この子供達はここで食事と衣服を与えら
れ、シャワーできれいにしてもらおう。夜にな

ると、その町に帰って行く子もいる。戻って
来たければ戻ってくるし、その子たちが欲す
ればいつまでもそこに留まっていいいのだと
いう。この子供達の世話をする人にとって、
ここでいちばん困難なことは何かと私はたず
ねた。この子供達は人間を信頼した経験がな
いことだとすぐに答が返って来た。それには
時間がかかるが、一度経験すると、今度は新
しく入ってくる子供の世話をするようになる
のだという。この子供達は、この町で家族の
感情や人間としての体験をしていないとパー
ドレは言った。どこの国にも養護施設はたく
さんある。けれどもこういう貧困地域の真ん
中にある施設は少ないだろう。ここはこの地
域のただ中にあるというのが特色でもあり、
驚きでもある。私共は部屋の一隅でお茶を御
馳走になった。机に真新しいテーブルかけを
かけてくれた。

私共の車はそこを出てさらに町の中を走った。いま訪問した施設はバードレの学校の第一段階だと説明を受けた。町の外れに男子のための学校があった。これが第二段階で、年齢は九、一〇歳から一四、五歳である。コンクリートの庭の一隅でフットボールをしていた。ここでもバードレはまず皆に囲まれた。

丁度、保健室で医師が治療をしていた。私にピンポンをしようと誘う男の子達がいた。

車はさらに郊外へと向かい、牛が放牧されている緑の牧草地を走った。ところどころにビニールハウスの温室があり、花を栽培してアメリカに輸出するのだとのことだった。その緑の草地の中に立派な学校があった。広い敷地に近代的な校舎がいくつも建っていた。少年と青年達は、普通の私立学校の生徒達と同じように、よい服装をし、健康で明るく、

だれがみても特別の子供達には見えないだろう。

私は突如分かった。あの貧困街のストリート・チルドレン達が、こうして三段階を経たとき、まったく変貌している。あの汚水の流れる街にうずくまっていた子供達である。文字通り、トランスフォーメーションである。このことを目の前に見て、私は胸が熱くなった。これまでストリート・チルドレンと言いつつ、ボヴァティと言われるとき、財政援助をすればよいのか、それには限りがあるし、どうすればよいのかも分からない不安と恐れとを私は感じさせられていた。こうしてみると、あの街の子供達を再生させているのは、人間を育てようとするバードレの視点、すなわち、心である。財政援助や金銭だけではこれではできない。最も大きな仕事は、教育は人

間を育てることにあるという考えをいろいろの角度から確認し、それを実行することである。OME Pは世界的な規模でそれを可能にするところに意義があると私は思った。

この学校では仕事をしない者は食べられないのだそうである。仕事と言っても必ずしも社会的な仕事とは限らない。掃除でも、自分の洗濯でも、その幅は広い。学校の中だけで通用する紙幣が発行されていて、これも学校の中にある銀行で本当のお金に換えてくれる。そのお金で、売店で衣服や日用品を買う。

学校では音楽と美術が重視されていた。音楽教室は平屋建ての建物が一〇室ほど広い敷地に並んでおり、その中央には生徒達が制作した、コロンビア独立の英雄、ボリーバルの銅像が建っていた。

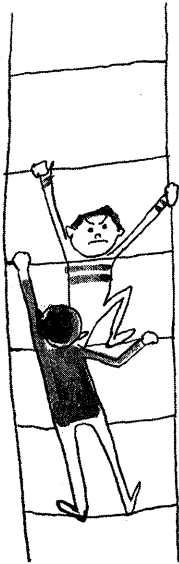
昼になって、私共のためにディナーが用意

された。それは最も正式の昼餐で、赤ワインを飲みながら、一緒にいった、ブラジルのデイドネー、フランスのグタール、コロンビアのベアトリーチェ・ド・ヴェガ女史と共に、この学校についていろいろとたずねた。パードレ・ニコロはイタリアのザビエル会の神父であること、しかし一生をコロンビアで過ごしたこと、この学校の子供達の食費と衣料費はコロンビア政府から補助されていること、その他はイタリアの財団によることなどを知った。

パードレは、貧しい人達から自分はいくつものことを学んだと語った。実際、ルカの福音書には、「貧しい者は幸いである」と記されている。こんな字義通り、貧困な者のことである。

グタール女史は、ずっと以前にコロンビア

で四年間幼児教育の仕事をしていたことがあるとのことで、帰途、車の中で、コロンビアの教育はこれから立派になると思うと熱っぽく語られた。私も今回、世界理事会の前に、四日間、国内の保育者たちの会合に参加し、また、パードレの仕事を見て、同様の感想をもった。南米コロンビアというと、日本の新聞では麻薬と暴力しか報道されない。新聞の



記事は実情のごく一部分に過ぎない。どこの土地にも、日々の自らの生活の中で周囲に平和を実現しようと一生懸命に生きている人達が大勢いる。そしてその人達の努力によってその国が保たれ、向上してゆくのであることを、私は今回の旅からも知ることができた。

(愛育養護学校)